特集“創立25周年を迎えて”

欧州のエコパーク視察記

竹　下　健次郎*

はじめに

去る平成7年10月，図らずも福岡市港湾局の企画に便乗して，ドイツと英国におけるエコパーク（エコロジカル公園）の実態を視察する機会に恵まれた。

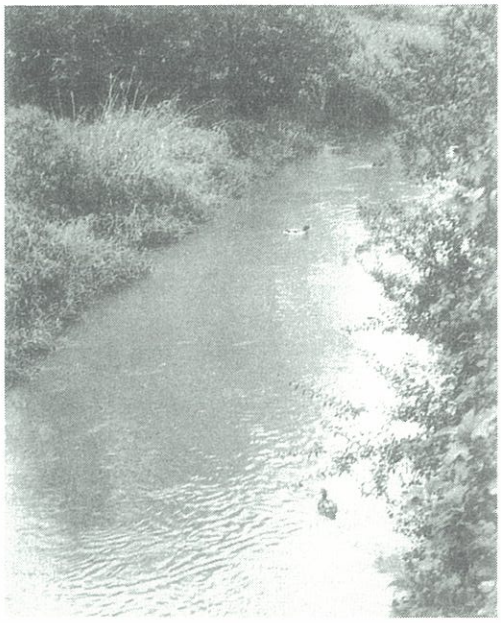
かつて，昭和46年の夏，欧米の河川を見聞したとき，ミュンヘン市を流れるイザール川の岸辺を約2キロにわたって散策したが，ドイツ人の河川に対する情熱にいたく感動した。このたび，再びその感激に接しようと，心浮きうき成田空港を飛び立ったが，そのイザール川のあまりにも変貌した姿に驚いた。しかし反面，依然として緑と水を愛するドイツ国民の心情にも接することができた。一方，英国人の抱くエコパークの理念についても，率直に私の所感を述べてみたい。

カールスルーエ市のピンツ川とアルプ川

西にライン川，東にシュワルツ・ワルド（黒い森）と呼ばれる森林に挟まれた，人口約25万人，面積約1万8千ヘクタールのこの町。約800年前，シュレス（城という意味）を拠点にして扇状に拡大していったという道路と住宅。今もなお，それぞれ30パーセントの森林と農地，それに40パーセントの自由地域（住宅・道路）で構成されている。その自由地域にも約12パーセントの緑地帯が配置されており，住宅はあたかも緑のルツボの中に埋もれているかのようである。街路や電車のレールの両側にも40万本といわれるプラタナスの並木が所狭しと立ち並んでいた。この市中をピンツ川とアルプ川という二本の川が流れている。

ピンツ川のたたずまい

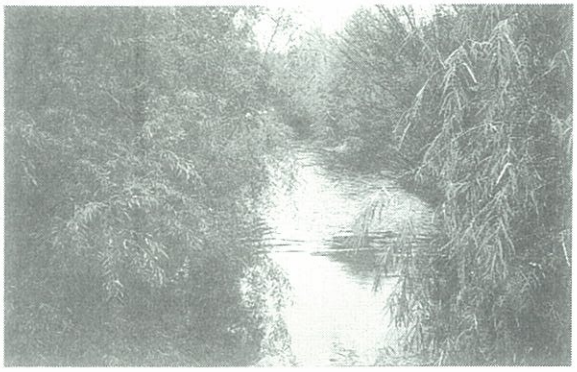
カールスルーエ市の西側を流れるピンツ川は延長2キロのライン川の支流であるが，広いところでもせいぜい20メートル足らずの川幅。たびたびの洪水で改修が行われたが，川岸に



ピンツ川

＊（財）九州環境管理協会顧問（九州大学名誉教授）

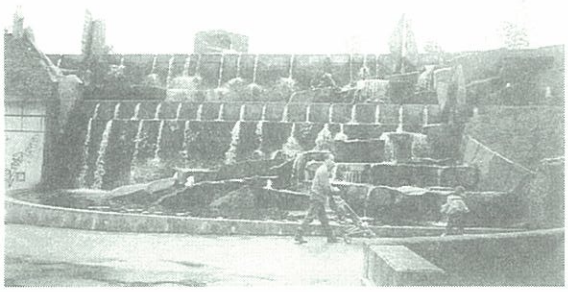
は樹木を植え，できるだけ自然の姿を残すように努めたそうである。その樹木としては，地下に深く根を張るハンの木が好適であると，案内のH・ケン氏は語ってくれた。雑草も年に一回程度刈るだけであり，昆虫や鳥たちの格好の棲みかとなっている。降雨量は約八百ミリ（年間），福岡市の半分程度であるが，シュワルツ・ワルドから流入する豊富な水量により常時一定の流速を保っている。福岡市の室見川や那珂川の上流も，コンクリートで護岸せずに，このようにハンの木などの植樹を施し，自然の面影を残してほしいものである。



アルブ川

アルブ川のビオトープ

カールスルーエ市の南側を流れているアルブ川もライン川の支流である。川幅はピンツ川よりもやや広く，広いところで50メートルぐらいだが，この川の水を利用してビオトープという人工の緑地帯が造成されている。ビオソープというのは，ギリシャ語で「生きるもの」という意味だそうである。そこへの道すがら，私どもを乗せた車はアウトバーン（高速道路）を走ったが，眼前に忽然としてトンネルが現れた。トンネルというものは，高い山を貫通するものだとばかり思っていた私は，一瞬たまげた。平地を縦横に走っているアウトバーンは到る所で立体交差をしているものの，トンネルはない。それなのに，約六百メートルにも及ぶトンネルに遭遇したのである。聞けば，その理由は二つあるという。ひとつは町を分断しないためであり，もうひとつは騒音の完全防止対策。したがって，トンネルを造成したあと，上部には覆土を施し，そこをビオトープと称するエコパークにしたという。車をおりてその丘に登ると，折しも噴水と滝のしぶきに見舞われた。そこには，幅約50メートル，見渡すかぎりの平坦な緑地帯が展開した。水はアルブ川から間歇的にポンプアップされているので，その緑地帯にはおのずから湿地帯や池も形成され，赤ナメクジや昆虫のほか，蛙などの小動物が生息している。さらに，南向きの斜面には数十メートルにわたって石垣帯が設けられ，太陽の熱をまともに受けて温暖地となり，トカゲなどの爬虫類が棲んでいる。所どころに生育している樹木や灌木は，殊さら植樹したものではなく，アルブ川の流れに乗って漂着した種子が自生したものであるという。それぞれの生態系をもつ生物がそ



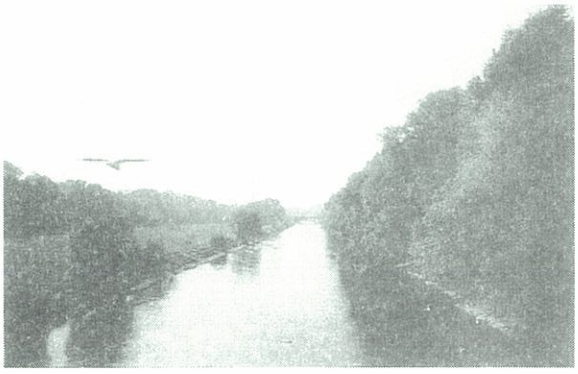
カールスルーエ市のビオトープ（入口の瀧）

れぞれ棲みやすいように工夫されていた。ただ，このエコパークは1989年に撤退したアルミ工場跡を利用しての，いわばミニテストの域を出ないようにも見受けられたが，ドイツ人のエコロジーに対する情熱と，「平地にトンネル」というユニークな発想には感嘆措く能わざるものがある。

カールスルーエ市のビオトープ（石垣と緑地帯）

イザール川の情緒

かつて（25年前），リヒテンブッヒという橋のたもとからイザール川の岸辺におりた私は一瞬「あっと」驚いた。ところが，今度もまた「おやっと」わが目，わが記憶を疑った。そこには，かつて見たこぶし大の石ころ混じりの川原は見られなかった。代わって，美しい緑一色の，あたかもゴルフ場のフェアーウエイを思わせるような芝生の絨毯が敷きつめられていた。ただ，その芝生の上には，むかし同様，数組の男女の群れが日光浴をしていたものの，あの素朴な川原の面影はすっかり姿を消していた。これはおそらく，その翌年（1972年）に開催されたオリンピックという一大イベントに対応するため，巨費を投じて改造したためであろう。どちらが良いかは一概に言えないが，青銅特有の渋い錆（寂び）を洗い落として，ピカピカに磨きあげたブロンズ像を思わせるものがあり，さきのカールスルーエ市のビオトープの理念とはいささか背反するようでもあり，一抹の寂しさを禁じ得なかった。しかし，両岸の鬱蒼たる樹林には昔ながらの風情が残されていた。

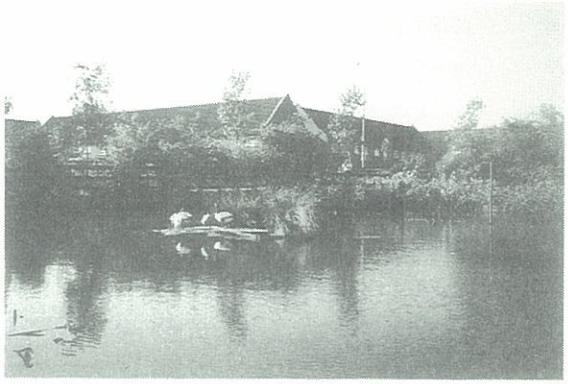


イザール川

ところでこれは余談だが，ミュンヘンの市内に足を踏み入れた途端，驚いたことが一つある。それは，今どき百万都市の路面電車は廃止の運命を待っているというのに，同市のウデ市長は無類のチンチン電車の愛好家だそうで，一度撤去したレールを再び敷設していたのである。市長という，偉大なる権限をあらためて痛感させられた。と同時に，かつて進藤一馬元福岡市長が一婦人の嘆願書に感激して，道路を曲げても一本の老木を保存したという，あのエピソードを思い出すのである。

ロンドンのラベンダー・ポンド・ネイチャーパーク

「新興住宅地の一角に造成されたエコパーク」という予備知識だけで現地入りしたが，ベン・デュハースト氏の説明を聞くまでは，その実態を皆目予想すらできなかった。彼の説明に



ラベンダー・ボンド・ネイチャーパーク

よれば，この地区はかつてテームズ川の波止場として栄え，木材や穀物などの物資の輸送基地だったそうである。しかし，いまや一万トン級以下の船舶では経済的に対応できない新時代である。ロンドンの町は1960年以降，あたかも坂道を転げ落ちるボールのように，急速に衰退の一途を辿った。そういえば，25年前にきたとき，テームズ川を間断なく上下していた二百トン級の船の姿もみられない。それどころか，ベルファースト号という巡洋艦が船の通行を妨害するかのように，テームズ川のど真ん中に博物艦（館）として永久停泊をしていた。かくしていまや，このラベンダー地区もゴースト波止場と化したのである。

1976年，英国政府はエコロジーパーク・トラスト（財団）設立したが，この地区はその二番目の指定地になったという。面積約一平方マイルの土地をもらって，そこに池を掘り植樹をして，このパークを造成したというわけである。建物は当時港湾の水位調節のために設けられた大型ポンプ室が改造されていたが，お世辞にも立派とはいえなかった。部屋の中には昔の港湾労働者の作業ぶりを偲ぶよすがともなるミニ博物館があり，児童の野外活動のための勉強部屋も用意されていた。折しも，二十数名の小学生が二人の女教師に引率されてきていた。池をゆっくり一廻りするには30分もあれば十分という広さである。池には魚もいなく（これは釣り人の来襲を閉め出すために無魚池としたそうであるが），水草や雑草が繁茂し，いかにも自然の姿を現出しているかのようであった。しかしよく見れば，所詮泥沼である。英国人はこのようなエコパークをネイチャーパークとか，ナチュラルパーク（自然公園）と呼んでいるが，これはおかしな造語である。公園というものは人間が造ったものであるから，そこにはもはや自然というものは存在し得ないはず。さきのドイツのビオトープの理念とはいささか趣を異にしているように思われた。

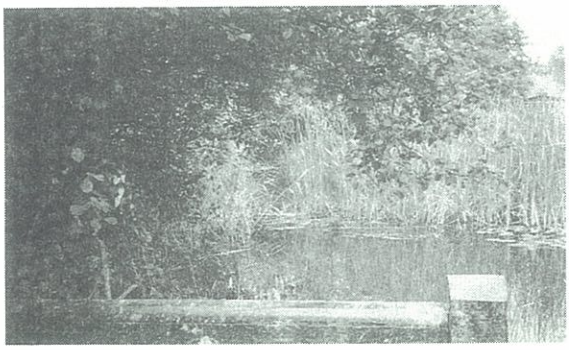
ところで，折角はるばる日本から来たというので，ガイドはテームズ川対岸のロイアル・ドック・アイランドの新商業都市にも案内してくれた。ここはサッチャー元首相が政治生命をかけて開発したところ。沢山の倉庫を撤去して大型のマンションを建設し，モノレールやトンネル道路を敷設したが，五十階建てのカナダハウスには期待した企業が入居せず，いまだに75パーセントが空き部屋だという。「入居費が高いからです」とガイドは説明したが，それだけではあるまい。テームズ川の輸送機能を失ったロンドンの町は，もはや大型商業都市としての資格はなく，歴史的に価値ある建物や貴重な文化財を保有する観光都市として，今後の生きる道を求めなければならないであろう。

カムリー・ストリート・ナチュラルパーク

ロンドン市の北東郊外にもエコパークがあ

るというので，行ってみることにした。現地に近づくと，数基のガスタンクの残骸が見えた。聞けば，十八世紀末に世界で初めて石炭ガス灯でロンドン市街を明るく照明したという，あの有名なインペリアル・ガスライト・アンド・コーク・カンパニーのガスタンク跡であった。「住民は早くあのタンクを取り除きたいのですが，国の重要文化財に指定されているものですから」と，ガイドは言った。タンクのすぐ傍らでは「こいつはどえらい邪魔者だ！」といわんばかりに，ブルドーザーが荒々しく作業をしていた。たしかに，どえらい重文にはちがいないが，途方もない大きなタンクをそのまま保存するよりも，歴史的にはむしろ跡地（位置）の方が重要であるから，モニュメントだけでもよいはずだ。タンクそのものは写真保存で十分ではないかと，余計な愚痴をつぶやきながら，ガスタンクとは道路を挟んで隣接していた目的地のカムリー・ナチュラルパークの門を潜った。

公園の管理責任者ホース氏の説明によれば，この地区はむかしゴミの捨て場だったが，1983年市民によって自然公園委員会が発足し，一年がかりでやっとこのエコロジーパークを造成したとのこと。総面積は2エーカー。池を中心にして回遊道路があり，池には葦や蒲の穂も見られた。植樹した樹木は百六十種だという。しかし，人手を加えることは一切禁物だから，雑草は生え放題，木の枝は伸びるがまま。池の面には緑の浮き草が一面に繁茂し，水は澱んで動かず，ここも泥沼の様相を呈していた。とても私どもが想像していたような自然公園ではなかったのである。真の自然というものは，山奥の渓谷にみられるように，水は滝のように流れ，空気はすがすがしく，馥郁たる木々の香りが漂うところ。人手を加えず，ひたすら放置しておくことを自然だと勘違いしているのではあるまいか。「三尺流れれば水清し」の諺のように，動いている水こそ自然の水なのである。スイスの谷間には，しぶきをあげて岩間を飛び散り，空気の泡を抱き込んで，あたかも雪のように白く見えるので，「ワイスト・ストルム」と呼ばれる川があるが，この姿こそ自然の象徴である。見学を終えた私どもは，ホース氏の求めに応じて僅かながらも献金をしたあと，悄然たる思いでそのナチュラルパークを後にした。

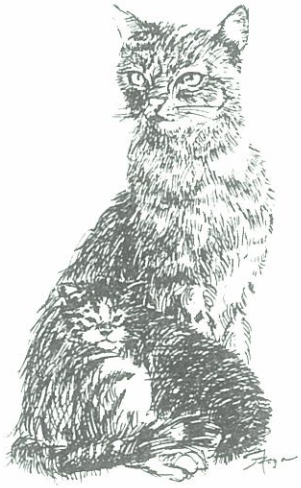


カムリー・ストリート・ナチュラルパーク

おわりに

言葉や語彙のあげ足をとっては恐縮であるが，前述のように，「ネイチャーパーク」とか，「ナチュラルパーク」には語弊があると思う。日本語に訳せば，ともに「自然公園」ということになろうが，そもそも自然と公園とは両立しない。ドイツ人が呼称している「ビオトープ」という名称は適切であるが，英語では「ネイチャー・ライク・パーク」（自然らしい公園）と言うべきである。というのも，さきのカムリー・ナチュラルパークで，「池に亀を放したところ，

蛙の卵を食い荒らしたので亀は追放しました」と，何気なく言ったホース氏の言葉が気にかかる。「それだったら，ここはネイチャーパークではなく，フロッグ・ポンド（蛙の池）と呼んだらどうですか」と反問したかったが，さすがに口にするのは遠慮した。自然の生態系は複雑多様であるから，亀と蛙はもちろん，メダカとドジョウも共存できない。「もし，動物園の柵を取り払って，ライオンと兎を同居させたらどうなるか」という愚問も出そうになる。

さきのドイツのビオトープでは，トカゲには暖かい石垣，蛙には池，赤ナメクジには湿地帯，昆虫には緑地帯がそれぞれ設置されていたが，まことに適切な思考である。ただ，狭い公園の中で多くの生態系を共存させるのは不可能である。アフリカの広大なところでさえ，動物たちの生態系が怪しくなっているそうである。

されど，今後どこかで「エコパーク」を造成しようと計画するならば，「ここはメダカのエコパーク」，「あそこは蛙のビオトープ」と呼ばれるような，それぞれの生態系にマッチした「ネイチャー・ライク・パーク」を企図し，メダカやオタマジャクシを見たこともない子供たちのための教育施設を造成してほしいものである。